

## あとがき

サハラを後にした私はブラックアフリカを不安と孤独にまみれながら下っていった。当時、石油が出たことで急成長を始めていたナイジェリアでは、JETROの職員家族の家に居候してインフラ調査のレポートづくりのアルバイトをして500\$もの大金を稼ぎ、日本食を食べ、ビールを飲み、そして清潔なベッドで寝起きした。そこで書いたのがこのサハラ・ザックだった。生の原稿は100枚を超えた。それを日本に送って友人に清書してもらい、月間「旅」の旅行記大賞に応募してもらうことにした。ところが、友人達は応募締切日を間違え、気が付いた時には二日しかなく、原稿用紙50枚以内という条件を受けて、ただブツ切りしたままつなげて送っただけに終わった。



その年の10月に帰国した私は、彼等がなぞったサインマーカの跡をみながら、かれらの努力に感謝すると同時に、これじゃ話にならないわと思い、もう一度自分で応募することにした。それが、この作品となった。冬のある日、私は小さな本屋で月間「旅」の前に立った。この中に結果が出ている。何度もためらいながら頁をめくり、結果の出ている頁にたどり着いた。30作あまりが一覧されていて、そこに佐座雄造という文字がやけにはっきりとみえた。「あった!」と思いつつ、もう一度みてみると、自分の名前がはっきりとみえた理由が分かった。最終6選まで残った作品は太字で示されていたのだ。

しかし、サハラ・ザックは残念ながら最終審査で落ちた。大賞に選ばれたのは南米の原住民を訪ねる女の子の話だった。私は意気消沈しながら、サハラの同土達に「申し訳ない」と心の中で頭を下げた。総評を読んでみると、大半の審査員は旅に目的を求めていた。それでサハラ・ザックが落ちた理由が分かった。私のあの旅には目的などなかったからである。ただ、一片の木の葉が風に舞うように。目的どころか、自主性まで失いつつ、砂の上を滑っていたにすぎない。しかし、私は自信をもってこう思った「旅に目的なんてない。目的を見つけれられるほど旅という相手は小さなものではない。そんなに自分が大きいというのなら、旅の面白味なんて見つけれられるはずはないのだ」

アフリカを後にして私は欧州に飛んだ。もちろん闇の両替が4倍もしたガーナから飛んだのである。

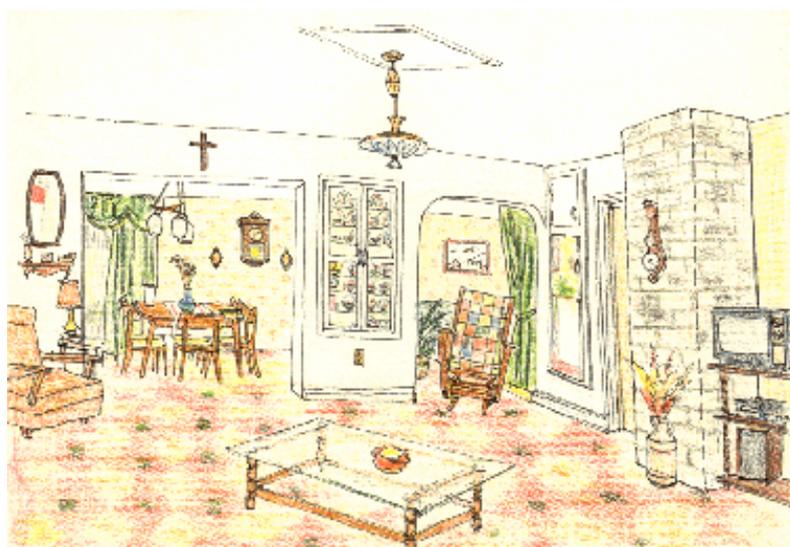


貧乏人の私はそのボロボロの服と薄汚ないヒゲで隠された顔を誇りに思いながらローマからパリに入り、日本で一人、寂しい思いをさせていた彼女（今の奥さん）をパリに呼んだ。彼女は20数時間の飛行で疲れ切った顔をしながらオルリーのイミグレからでてきた。それは思ったより静かな再会だった。そして、その夜私が彼女のために案内したパリの宿は、あのベルナードから借りていた大学の寮の小さな部屋だった。マロニエの木が並ぶパリの夜を連想してきた彼女に、この現実的なシングルベッドはどんな印象を与えたのだろうか。（写真下 ベルナールの家でお母さんと・・・）

パリではもちろんオリビエとマルチンのいるアパートにも遊びにいった。オリビエはサハラと同じに人のよさそうな顔で我々を迎え入れ、マルチンは日本から来た小さな美人を、浮世絵でもみるかのような目でみつめていた。



その後、我々はフィンランドを除く西欧の全てと、東欧を少々歩いて、次にカナダに飛んだ。カナダはヒッチの天国で、トロント～バンクーバーに至る5000キロを全てヒッチで横断した。そして、その途中、サハラの同土だったダイアナの家にしばらく居候させてもらった。ダイアナはサハラの後でイボンヌと別れていた。イボンヌは別の女を好きになっただけらしい。ダイアナは私にイボンヌにあって欲しいとあったが、私はそれを無視して旅を続けた。カナダを東から西に横断した後は、アメリカを西から東に横断し、再び欧州に飛んで、最後は大韓航空の南周り便で日本に帰国した。



私と日本を一緒に日本を出た3人の内、インド人に憧れていたヒロミは、今では3人の子供の母を立派に勤め、本多君は有名な書道家になった。そして、サハラの入りにまで一緒に行動した小畑君は欧州から再びアジアを経由して帰国した。彼は、すっかり旅の魅力に取り憑かれて、その後、結婚したにも関わらず、彼女を連れて世界一周を試み、最後はニューヨークで血洗いをしている内に胃潰瘍（カルテの英語を盗み読みしただけなので正確には分からない）で倒れ、救急車で病院に運ばれ、手術して、その手術代を踏み倒して日本に逃げてきた。

彼いわく、救急車で運ばれた場合には治療費はタダなのだというのが、そんな理屈がどこにあるというのか。以来、彼は日本で静かに暮らしている。丁度、大きな地震は突然襲ってくるようにとても静かだ。その彼が、このサハラ・ザック編集に協力してくれたというのは、きっと、また旅の病気が始まり出した証拠である。今度は子供を連れて世界一周に出かけるのだろうか。



エジプトでコーラを賭けて一日中やったドミノ。このパイがうまいんだ。小畑君は今でも夢にみるとか

さて、当の自分もすっかり静かであるが、こちらの方は毎年、業界の人を連れてツアーを組んで団長として出かけたりしながら、大地震の発生を防いでいる。仕事はたった一人の気楽な家業。それも住宅技術評論家というウサン臭い仕事で、得意の作文と語りで飯を食っている。でも、たった一人でも業界を変えてやろうという意気込みだけはあって、着々とその理論武装を構築している。

そこにはロマンがある。でもそのロマンはどこか旅のロマンとは違っている。しかし、旅で学んだ「世界の前で自分はあまりにも小さい」という観念だけはもち続けながら、私は業界の分厚い壁と戦っていこうと思う。時にはサハラの大地に立って、人間の小さな姿を確かめたりしながら、砂が風に舞いながら姿を変えてしまうように、静かに業界を変えてしまおうと考える。

今、私の耳にはモスクから流れるコーランが聞こえる。時間を超越したその呪文が、私のロマンの囁きに聞こえてくるのである。

作成：1993年